

戦後社会と宗教の役割

赤池 憲昭

本日は、皆さんと一緒に広い意味での宗教の役割を考えてみたいと思います。戦後五十年たちまして、今年は昭和でいうと七十年になるんでしょうか。皆様ご承知のようなオウム真理教事件が発生いたしまして、五十年目にこのような事件の起こった意味を考えてみなければなりません、そのオウム事件の後、連動してまた宗教法人法の改正問題も出てまいりました。誰もが、一体宗教をどう考えたらいのかという、大きな問題に突き当たっている状況だろうと思っています。

私は宗教を研究している立場ではありますが、同時に単

に研究だけではなくて、宗教とは人間にとって一番大切なものだという、考え方をもっているものですから、オウム事件をきっかけにして法律を変えて、何かその法律の変え方が選挙対策というような問題が背後にあることがはつきりしてまいりまして、非常に残念に思っております。宗教とはそのような単なる選挙の票の問題ではなくて、もっと私たち人間が生きていく実存的な問題、生きるこの本質的な問題ととらえていかなければならないのに、オウム事件のように言うことをきかないものはポアしてしまえとか、あるいは注射をして財産を盗み取

るとか、そんな考え方、やり方が宗教の名で行われ、しかもまた現在の市民社会にあつて民主的手続きなどを無視した形で法律を変えようとしているとか、一連の事件が連続して起こるのを見ていますと、私たち日本人が宗教をこの際もう一回みんな考え直して見る必要があるのではないかと、本当に実感しております。幸い「戦後社会と宗教の役割」という、大変ありがたいテーマでお話をする機会をもたせていただきましたし、私個人としても大変感謝しておりますし、また皆さんと一緒に一つ真剣に考えてみたいと、そういう気持ちでいます。

補償、統合、アイデンティティ機能

さて宗教の役割ですが、なかなか複雑な問題です。宗教の役割、言い換えますと機能主義という言葉があり、ますが、宗教の機能、働きをどう考えるかということとは、宗教学の大変大きなテーマの一つです。私なりにどう宗教の役割論を考えるのか、今までどのように考えられてきたのか、そしてその宗教の役割に対する考え方がどう展開をしてきたのか、その問題をまず皆さんと一緒に考

えてみましょう。日本の戦後五十年という歴史の中での宗教、とりわけ教団を中心にした宗教を考えてみたいと思っております。戦後の教団史をどうとらえたいのか、そして戦後社会の日本の中で、教団がどんな役割を果たしてきたのか、またこれから果たさなければならぬのか、そうした流れの中で話を進めてみたいと思います。

宗教の役割をテーマにするとして、そもそも宗教とは一体何なのかという、大変厄介な問題があります。いろいろな文献等を皆様もご覧になったかと思いますが、宗教とは何かという問いに対しては哲学者、神学者、あるいは社会学者、人類学者を含めて、様々な定義があります。最近よく言われる定義の一つに「意味と象徴の体系」という言い方がありますが、と言われても簡単にはわかりませんね。ある調査によりますと、百四つぐらい宗教の定義があつて、そんなにあったら交通整理をするだけでも大変なことでしょう。

二十一世紀までまだあと五年ですが、おそらくこの五十年間にそんなに大変な学者が出るとはちょっと思えない

ものですから、もう二十世紀を代表する最高の宗教と社会の問題についての研究者と言ってさしつかえないでしょう、マックスウェーバーというドイツの学者がいます。彼が宗教をどう考えているかを尋ねてみますと結局ウェーバーは、定義はやめておこうと言ってますね。人々が宗教と考えるものを宗教と言えはいじやないか、最初から定義だ、あだだと、細かいことをアレコレ並べ立てても、到底これが全部のコンセンサスを得るような内容になるわけのものでもない、むしろ学者は学者なりに、あるいは一般の方は一般の方なりに、それぞれ自分で宗教についての思いをもっておられるんだから、まずはそれでよろしいんだ。それでは一体それがどんなものなのか、例えばどんな役割をしているのか、人の心にどういうふうな感銘を与えているのか、社会をどのようにまとめようとしているか、ということをも具体的に我々がひも解きながら、そして最終的にこうなんだというように結論が出ればそれでいい。

宗教とは生きものでありまして、我々自身の問題であります。よく言われますが、では哲学と宗教とどう違う

っています。この問題がきょうお話をする流れの中で一つの結論として私が考えている事柄であります。

さて、人間の心理とか、あるいは人間の社会に対する宗教の働き、機能については一般の人々もいろいろと意見をもっていますし、また学者がそれぞれの角度から私たちに教えてくれています。いま細かいところはカットさせていただきます、大きな輪廓でこの問題を考えてみましょう。

例えば、皆さんは車を運転される方はたくさんいらっしゃると思います、おそらく多くの方が車の中に成田山のお札、交通安全のお札をさげる場合が多いんじゃないでしょうか。そういったお札がそのまま宗教であると言うのはちょっと問題がありますが、いま仮に一つの例として考えてみたいと思います。一体、なぜ交通安全のお札を車に吊るすのかという問題です。もしお札を吊るしておけば絶対に事故がないと言ったのだしたら、これは世界中から交通事故はなくなるかもしれません。もちろんお札をさげている人も、さげたら絶対に事故はないなんて考えている方はいらっしやらない。つまり私たち日

のかというと、哲学というのは、一般的に言えば抽象的な論理を中心とするものです。宗教もちろん、宗教の論理があります。ウェーバーが大変大切に考えてきたものなんです、しかし宗教は哲学のような意味での抽象的な論理ではなくて、これは皆さんよくおわかりだと思いますが、体験的な世界の問題であります。ただ頭の中で理屈をこねればいいのではなくて、それによって自分がどのように生きるかという、人間の生き方自体が問題になってくるのが、これが宗教です。

その点から申しますと、私たちは宗教の問題を扱う場合に、難しさと同時に、非常に大切な問題だということが、その中から出てくるわけですが、理屈でもってこねまわして、こちらがよろしい、こちらが悪いという問題ではなくて、お一人お一人がそれによって自分自身を支えておられる、生きておられる、つまり体験世界というふうなものがあって、宗教が存在します。もし宗教の論理があるとすれば、それは哲学の世界のような抽象的な論理ではなくて、もう少し違った論理を考えていかなければならない。ウェーバーはそれを「意味の問題」と言

本人、教育の程度の高い文明化されている私たちは、お札があれば事故がないなんてことはとても考えておりません。にもかかわらずなぜ吊るすのでしょうか。

これについて二つの解釈の仕方があります。車は非常に危険な乗り物であります。自分が丁寧に運転をしても、飛び込んでくる車もあります。命を奪いかねません。常に危険を予想させる乗り物です。そこでお札をさげておけば事故がなくなるとは誰も思わないけれども、しかし、そういう危険な物を運転しているという私たちの心の不安、それをなだめてくれる意味でお札の効用がある。つまりこれは現実の問題として事故があるかないかではなくて、私たち人間の心のうち方にある作用をしてくれるんだ。宗教というのはそういうものなんだ。直接的な効用ではなくて、私たち人間の心のあり方についての一つの役割をするのが宗教だという考え方、欠けているものを補償してくれる、苦しみを慰めてくれるというので、慰めの機能と言ってもよろしいのですが、これが補償機能と呼ばれている働きです。宗教は私たちの心を慰めるという、現実には直接的に問題を解決するかどうか

かではなくて、私たちの心に一定の温かな慰めの手を差し伸べるのが、これが宗教の役割なんだという考え方があります。

それに対して、またもう一人別の学者が、いやそうではないという説を立てました。宗教は不安を慰めるのではなくて、不安を与えるんだ、不安を広げるためにあるんだ、という説を出しました。不安を強めるためという、何だかちよつと変な機能のような感じですが、私たちの心に、不安というかあるいは緊張といった方がいいかもしれません、そうした作用を及ぼすと言っているのです。もしお礼も何かなければどうということもなく運転しているかもしれないのに、交通安全のお礼があるから「あ、事故をおこしちゃあいかな」という事故に対する不安感、緊張感を私たちの心に与える。そして気をつけて運転しましょうと私たちの心を統一集中させる。その働きが宗教だと言っているのです。繰り返せば、不安や緊張を引き起こして心を集中させる、つまり統一する。そういうところから宗教の統合機能と言います。

今のお礼の例を今度は別の角度で、儀礼の側面から考

残念だ、遺族の方の悲しみ等を思うとどうにもやりきれないというような内容を必ず入れることになると思います。しかしそれだけではなくて、もう一つは、けれどもどうぞ一つ安心してお眠りください、あとにあなたが残された遺族の方々は我々がみんな力で出しあつて支えていきますから、どうぞ安心して永遠に安らかにお眠りくださいと、必ずそういう言葉をつけるのが、弔辞のパターンになっています。

私たちは一人ひとりがみんな自分の宇宙をもっている、コスモスをもっています。どういうことかと言うと、皆さんお一人お一人が自分のご両親、あるいはお子様方、あるいは友人、あるいは知人、近所の方、そうしたつながりをもつて、ちよつと蜘蛛の巣の糸のような中心に皆さんがいて、その人間関係のつながりの中で皆さん独自の世界をつくっておられる。これはお一人お一人の世界であり、顔と同じように全く同じものは絶対にありません。もちろん兄弟とか親族で重なりあう蜘蛛の糸のつながりはあるかもしれませんが、全く同じということはないわけであつて、その意味から言いますと、人間は、人

えてみますと、同じようなことなのですが、これも皆さんよくご承知のことですが、葬儀ですね。なぜお葬式をするのか。もちろんお葬式をすれば亡くなった人が生き返ると信じている人がいるかもしれませんが、あるいは靈魂が肉体から離れて、そして天国へ行くと信じている人があるかもしれませんが、宗教の役割の立場から言いますと、そういうことはちよつとわからない。どちらとも言えないことなのですが、役割の点では非常に明確です。一つは、亡くなった方の、特にご遺族を中心として皆さんが集まつて、大変お気の毒でした、どうぞ一つ力を落とさないで頑張ってくださいという形で激励される。創価学会では友人葬という形で、そういう行事をもつておられると聞きましたが、みんな悲しみにある人々たちを慰めてあげる働きをこの葬儀という儀式はもっています。つまり補償機能の働きをすることになります。

しかしそれだけではないんですね。よく告別式の時に弔辞を読む場合の弔辞のコツがあります。これも皆さんはよくご承知だと思いますが、一つは今申しましたように、亡くなった人がどんなに立派な人だったのか、大変

人間関係のコスモスという言葉を使うんですが、もうその人しかもっていない世界を誰もがもっているんですね。ですからその人がもしなくなってしまうと、そのコスモス、宇宙は崩壊の危機にさらされる。今まであったものが無くなってしまう。代替できない世界ですね。そこでお葬式の機会にその方が仮にいらつしやらなくても、その方がつくっていた宇宙はみんな支えていこうじゃないか。つまりこの人がもっていた独自の世界を壊さないで、みんな互いに力を出し合つて、そして亡くなった人はいらつしやらないけれども、ご遺族を中心としたそういう宇宙をいつまでも保つていきたいという、いわば人間の一つの統合的な世界、統一的な世界をいつまでも守りたいという願いが葬儀という儀式に出ているわけです。

したがって今お話しましたように、葬儀一つとりましても、さっきのお礼の例をとりましても、宗教には二つの大きな働きがあつて、一つは慰めの働き、一つは緊張を媒介とする統合の働きがあると一般に言われます。これが従来宗教の二大機能と言われていまして、補償機

能、統合機能と呼んでいるわけです。

実はこの宗教のもっている二つの働きというのは、これは別々のものではありません。先ほどお話ししましたように、お札についても両方の側面で説明できます。葬儀についても両方の機能で説明できますから、この宗教は補償機能だとか、この宗教は統合機能とか、別々の宗教の働きとして考えるのではなくて、宗教の中にある二つの働きとしてお考えになることがまず第一に大切です。

ところで、従来は宗教の機能論と申しますと、もっぱら今までお話しした補償と統合という二大機能が指摘されてきたのですが、戦後の研究のなかで、もう一つ、重要な機能を取り上げられるようになりました。もつとも学説史の系譜からみれば、先ほどもお話ししましたウェーバーの意味の問題がすでに扱っていたと言ってもよろしい。それはアイデンティティの機能と呼ばれています。他に言い換えますと自己の身元を保証する働き、あるいは自己認識の働きとも言われています。もちろん、個人の場合にも集団の場合にも適用できる働きです。

戦後50年、教団が果たした社会的機能

例えば、葬儀の事例にあてはめてみますと、葬儀に参加した人々は儀礼を通じて悲しみを和らげたり、残された者の結びつきを確認するだけでなしに、死に直面して自分たちの存在について考えさせられます。普段は日常の多忙にまぎれてあまり考えることもなかった死の問題。自分たち自身もいつかは必ず行き着くことになる死について、改めて考えさせられます。一体死とは何だろうか。この私という存在は何なのか。ひるがえってどのように生きるべきなのか、などなど。葬儀は私たちの存在の根柢を問う儀礼でもあるのです。慰めや結びつきがいずれかと言えば私たちの感情の側面にウェイトがあるのに対しアイデンティティ機能は存在の意味を問う論理的色彩が強いと言つてよいでしょう。個人のアイデンティティ、集団のアイデンティティについて、今までいろいろな宗教の論理が展開されてきたのでした。例えば単純な例としては、死ねば永遠の生命が得られる天国へ行くのだ、と言うように。

やや機能論に時間をとりましたが、実は、これまでまとめてきました補償・統合・アイデンティティという三つの宗教の働きを、日本の戦後五十年間の教団の働きの流れとして問題にしてみたいのです。どの時代にあっても三つの機能は生きているのですが、常に均等配分で働くわけではありません。いずれかの働きが焦点となりながら教団の発展史を形成していくのですが、戦後日本の全体社会の中で、教団がどのようにその社会的機能を果たしてきたのか、このことを、これから年代を追ってたどってみたいと思います。

昭和二十年を起点として考えてみますが、昭和二十年から三十年まで、この十年間というのは、二十五年に始まる朝鮮事変をはさんで日本人が生活の上でも価値意識の点でも大混乱の年代でした。この時代の教団史を大づかみにまとめてみたいと思うのですが、やはり従来からの伝統的教団と戦後に脚光を浴びる新しい教団組織とは区分することが妥当でしょう。ですから、この区分は、その後現在に至るまでの一つの基本軸として設定して論じることとします。

古い教団、これまでずっと日本の江戸時代から流れてきている、そういう教団、多くの仏教教団がありますし、神道系の組織があります。神道は特に国家神道という時代を経て、戦後神道指令で解体して、新しく神社等を中心とした、教団と言つていいかどうかは問題がありますが、一応そういう形をつくって再構築をするわけですが、組織上の分離・分立、経済的基盤（土地所有など）への打撃、および社会の適応力の喪失など混乱の年代がこの十年間の特徴としてあげられるでしょう。

一方、新しい教団はどうか。信教の自由という日本人にとつては初めての経験。それまでに信教の自由が全くなかったとは言いませんが、常に日本ではその時の権力的な、政治的な価値が優先する社会が存続しており、宗教はいつもその支配下にあつて、権力にお伺いをたてないと自分たちの活動ができませんでした。これはもう皆さんいろいろな日本の歴史を見てもおわかりになるように、ずっと昔の聖徳太子の時代までさかのぼればまた別ですが、一般にはそういう政治的な価値を優先する社会ですから、信教は自由だ、ノーコントロール、ノーサポーター

トと言う、今、我々にとっては常識となっている宗教集団のあり方というのは、やはりこの戦後の憲法の保障から出発したと考えていい。新しい教団はもちろん仏教や神道の長い教えの流れを汲み取っているわけですが、教団としては新しく成立して、自分たちの活動を始めることになる。普通、新宗教という言い方をしますが、この時代はまさにこれらの教団にとっては前途に希望の輝く新発足の時代であり、また、かつて戦争中に弾圧された教団にとっては再建と再生の時代でありますから、旧来の宗教と比べれば非常に明るい形で歩みを始めました。新旧が大変対蹠的な姿勢で戦後の教団史が幕を開けました。

つづいて昭和の三十年から五十年ぐらい、この時期をどういう特徴で囲むことができるかと申しますと、伝統的教団では、分裂混乱の時代がだんだんおさまります。一つは日本が経済的に成長していく過程でありまして、これが教団形成にも非常に大きなインパクトを与えます。そこで何とか自分たちのあり方を、教団を安定化させていきたいという試みを各教団がさかんにやっています。

す。そして安定化と同時に復活と言いますが、復興と言いますか、もう一度自分たちのもともともっていた力を元に戻したい、それにはどうすればいいだろうか、なかなか戻らない、戻らない場合にはどういうふうに変身しようかと、教団近代化の課題も含めていろいろ試行錯誤があつたと思いますが、模索の時代であつたと言ってもいいと思います。

一方、新しい教団はまさに組織化と拡充化の時代でありまして、教団が自分たちの教団としての統合機能を大いに発揮してまとまっていく時代、そしてそれを全体社会の中に展開をしていくこうとする挑戦の時代であります。組織化、それから展開、こんなところが新宗教の一つの流れであつたかと思えます。

更に五十年から六十年までのこの十年間、この十年間を見ますと、伝統教団の流れは何とか自分の安定化を図ろうという形はなお依然として続いていたと思います。あまり安定化を図った結果、だんだんと都市化現象に伴って全体社会の中に埋没していくという可能性も非常に強くて、安定化というだけではちょっと言い切れない点

もあることは事実です。

それに対して、一部には既成の教団が、アメリカやハワイが大体中心だと思えますが、外に向かつても自分の勢力を伸ばさなければいけないと考え出していつて、それから神道ですと神社を、今まで国家主義の担い手だと思えさんざん叩かれた神社などが、もう一回日本風の宗教の価値を外に向かつて宣伝をしたいというような、そういうやり方をこの時代から始めていますから、ちょっと大袈裟かもしれませんが、一種の国際化を目指そうとしたと言えると思います。

新しい教団の方は、いわゆる新新宗教の芽生えがはつきりとしてきます。戦後の時代が仮に新宗教時代といえますと、カルト的、オカルト的な流れが強くなって、いろんな細かい単位の新しい宗教、新新宗教が生まれ出してきたというのがこの全体の傾向の一つの特徴だと思います。そして、戦後時代の新宗教、創価学会なんかは一番典型的なんです、伝統宗教と並んで、と言うよりははるかに強力に、日本の宗教を単に日本人の宗教としてとどめておかないで、多国籍宗教なんて言う人もあり

ますが、要するにアメリカでもイギリスでも、あるいはフランスでも、最近ではロシアでも、日本の仏教思想に共鳴する人たちの集団を次々と作っていく運動が広がります。

私はフィンランドで国際宗教社会学会というのがありまして、そこへ出かけました時に、向こうで創価学会の関係の方と一緒にしまして、イギリスでいろいろ話し合う機会がありました。その時、私の車を運転してくれた人がイギリスの青年で、非常に明るい顔付きであちこち車で回ってくれました。「あなたはもともとクリスマスチャンではないんですか」と聞きますと、そうだと言う。どうして創価学会の会員になられたのかと質問をしましたが、その青年は別に難しい理屈を学んでいるわけではなくさそうでした。イギリスという国は確かにキリスト教、歴史的にはそういう国なんです、これは皆さんもご承知の世俗化のナンバーワンの国なんですね。どのように世俗化を考えるかという一つのポイントとして、宗教の個人化という問題が世俗化だという考え方があります。キリスト教は教会型宗教ですから、必ず一週間に一回み

んなを集めるんですね。あるいはとにかくみんなで信仰を表現し合って、そして教団として、例えば福祉事業をやるとか、ボランティアをやるとか、統合機能の大変強い教団なんですね。それがだんだんとみんな教会へ来なくなる。

私はその時よりも少し前に、オックスフォードに滞在しておりました時に、試しに日曜日に教会へ行ってみたんです。やはりアングリカン・チャーチというのはカトリックの系統を引いてますから、教会自体がすごく大きいんですね。日曜日に行ってみたら、大伽藍の中に、お年寄りがポツリポツリと二、三組いらっしやるだけです。そこへ牧師さんが来て、困ったような顔をしていたんですが黙って帰るわけにはいかないものですから、空間に向かって何か喋って、お茶を濁しておしまいにしておりました。私はイギリスの人にどうして日曜日に教会へ行かないんですかと聞いたら、いや日曜ぐらい休ませてくれと言うんですね。忙しくてしょうがないと。まあ別に全然信仰が無いわけではなくて、朝飯を食う時にはみんなでお祈りをしているんだから、それでいいじゃないか。

て家庭も持っていない者はすごく不安なんだ。だから難しいことは言えないが、会員になつているととても安心ですと、こう言っていました。私は非常に結構だと、ただ安心していただけじゃなくて、もう少し学会が掲げている仏教の教理を学ばれると一層あなたの心に土台ができていくんじゃないかと、学会に代わって宣伝をしておきました。

話を元に戻しますが、この五十年から六十年代というのは、特に旧宗教も新宗教もある意味で同じように、日本だけではなく、外の世界の中に自分たちの宗教の拡充を求める動きを少しずつ始めているんです。例えば曹洞宗なんかはフランスの修道院と提携いたしまして、禅と修道院の黙想と形態に似ているところがありますから、集団を作ってフランスの修道院へ行って一緒に黙想し、そしてフランス人に来てもらって日本の寺院で座禅と一緒にやってもらうというように、だんだんと多くの人々が関心を薄くしている修行をもう一回普及したいという、そのためには日本だけでは駄目なんで、ヨーロッパの修道院との提携の中で試みてみようとしています。密

要するに教会を中心にしてまとまるキリスト教の体質が家庭とか個人の状況に分解しているんですね。これはアメリカではちよつと違うんです。イギリスは特に世俗化が進んでしまっている。もし世俗化ということを教会離れに由来する宗教の個人化と考えると、それはイギリスの場合には最も進んでいると言えるかもしれません。日本の場合にはそのままではあてはまらない感じを私はもっています。

そういう中で、その青年は何か自分が非常に頼り無い、何となく不安でしようがない。それでたまたま学会に縁があつて入って、そして学会の仕事をやっているけど、とても安心できるんだと言う。やはり単にものが食べられるとか、いい着物が着られるとか、もちろん我々人間というのはそういう物質的な世界にとり囲まれていますから、そういうものに対する不満とか満足とかはいつものいつもあるわけですが、その青年の言い方をしますと、みんなと一緒にこの学会の中にとにかく自分には張り合いが生まれる。ところがキリスト教会だと、教会へ行つたって誰もいやしないんだ、自分のようにまだ若く

教系の天台ではよく外国の代表的な芸能人なんかを呼んで、比叡山の上で音楽会をやったりして、自分たちの宗教の位置づけの再生を求めようという傾向があります。

さて六十年から七十年、平成七年までですが、この中で私はある意味で宗教が更に分解するというか、多様化する傾向が強くなつてきていると感じます。一つは既成の宗教が安定化を図り、国際化を図って勢いを盛り返そうとする部分もありますが、制度の流れの中に埋没していくという傾向がやはりかなり大きい。

例えばお葬式ですが、今お葬式は葬儀屋さんがやるんですね。お寺さんがやるのではない。葬儀屋さんが全部仕組んで、あなたは何宗ですか、じゃああの坊さんと呼んで来ましょう、お布施はこのくらいと指示があり、あとは全部葬儀屋さんがいわゆる葬儀作業という形でやっていく。この間も、ある方の葬儀でお坊さんが呼ばれましたが、先約があるので長居はできませんと早々に切り上げて出て行かれました。一般の人たちもそれが一番手軽で簡単だからお願いしますという形になる。そうするともう私たちは、ことに仏教だとか何々宗だということ

はあまり考えなくなってきた。こういう傾向というのは非常に怖い。

私は宗教というのは、もちろん心を慰めるとか、みなで団結することなども非常に大切なことですが、それ以上に宗教が宗教として意味を失うと、やはり消滅していくだろうと思います。意味の世界、宗教的論理による、もつと易しく言えば教えでいいんです。みんなで儀礼を行うだけだと、慰めとか、あるいは結びつきの機能だけですと、宗教としての組織はもたないですね。宗教の原点は宗教のもっている教えの強さにあるものですから、勉強しない宗教は駄目です。伝統宗教でもそのことは十分感じているので、何とかそれを取り戻さないといけないというので、慣習的な制度へ埋没してしまっている既成宗教もありますが、一方ではもう一度組織化しようという模索をしています。例えば写経運動。お経を書くことで心を慰めるという意味もちろんありますが、実際にお経を書きながら、そのお経のもっている意味を解いていくという、そういう効用を通じて教えを一般に認知させていくという、認知機能と言いますが、そういう

た働きがあります。その他、座談会とかはがき通信とかいろいろ今やっています。

一方、新しい宗教の方は、先ほど、お話ししたこの年代の、いわゆるカルト集団の登場が表に出てきます。全体社会の動向に盲目なために全体社会から崩れ去っていったり、全体社会を敵に回すという、いわゆる宗教の社会的な機能から言いますと、マイナスの機能が働いている場合が多い。カルトというのははもともそういう性格をはらんで出て来るんだろうと思うんですが、先ほど、ちよつと時間を待っている間テレビを見ていた時も、名古屋の何とかというお寺で人間の霊魂がどうこうで、大儲けして警察の手入れがあつたと報道していましたが、ああいう市民社会の倫理から逸脱した傾向がこれからも出てくる可能性は十分にあると思います。

宗教社会学者として現代を代表するブライアン・ウィルソン先生はこう言っておられます。キリスト教の最も大きな功績は何であつたか。それは例えばアフリカの未開社会に宣教師たちが行って、そしてもちろんそこで布教をしたんですが、一番大きな働きは、その未開社会の

人々の考え方にインパクトを与え生活様式を変えることでその社会を向上させ、より文明的な、より教養のある社会への起動力となつたというのが、実はキリスト教の一番大きな役割と言いますか、メリットであつて、何も一神教だから偉い宗教だとか何とか、そういうことは話が違ふのだと申されています。創価学会の場合もいろいろな人がいろいろと意見を戦わせながら、教団を育ててきて、これだけの大きな組織を形成した。これからは更に自分たちのポジションを全体社会の中に位置づけて全体社会をより高めていく、良い社会をつくっていくという、そういう役割を担っていると思います。

教団の社会的存在理由の根本命題

ここまで、いろいろと事例を組み込みながら時々横道にそれたりしましたが日本の戦後五十年に渡る宗教の役割を主として教団史の観点から眺めてまいりました。この流れを前半でお話ししました宗教の三つの機能、すなわち補償機能・統合機能・アイデンティティ(自己認識)機能との関連でもう一度整理してみたいと思います。す

でに申し上げましたように、この三つの機能はいずれの時代の断面を切り取ってもそれぞれの仕方では働いてはいるのですが、時代の流れを一定の長さで計ってみますと、いずれかの機能が他に比較して表の舞台で活躍しているということは言えるのです。日本の戦後教団史の場合ですと次のようにまとめることができます。

まず二十年代から三十年代前後にかけては、補償機能が目立ちました。マックファーランドさんの著書で邦訳のあります『神々のラッシュアワー』という本があり、大変広く読まれましたが、このなかで「橋渡し機能」という適切な表現で、この年代の日本の新宗教教団の社会的機能を説明しています。戦後の混乱期、とりわけ価値観の転倒による日本人のニヒリスティックな精神状況を受け止めて、戦前から戦後への大きな精神的亀裂に架橋して民主的な新生日本へと心の結びつきと新しい価値への目醒めを導いたのが新宗教教団であると言うわけです。この年代、残念ながら伝統教団は積極的な社会的役割を果たすことはできませんでした。

三十年代ごろから六十年代にかけて三十年代から五十年

五十年から六十年は機能の上ではまとめておきます）は、新旧両教団とも統合機能が目立った時代と言えます。特に新宗教の場合は、前の年代の補償機能を引き継ぎながら教団組織内部の統合を確保するとともに、外部の全体社会に対して自己の主張を掲げながら挑戦していく時代、挑戦を通じて更に組織の拡大と統一を試みていく時代でした。一方伝統教団は挑戦機能という点では新宗教のような運動型の特質は発揮できませんでした。徐々に関戦後の混乱期から脱して自己自身の再生再興を志す教団統合の模索を進めました。新旧両教団とも国際的な進出をはかつて組織の拡充をはかる傾向がありました。

一方、この年代から次の年代、つまり六十年代から七十年代（平成年代）にかけて、マスコミを賑わせた宗教現象が話題になりました。「宗教ブーム」の時代というのがそれで、昭和四十八年から十五年間ぐらいの期間を言います。日本の社会史で言えばオイルショックからバブル時代へと続く時代です。この期間に芽生えてくる新宗教が新新宗教などと呼ばれる宗教で、それまでのセクト的ないしデノミネーション的性格の新宗教教団

の問いは定義の問題ではなく、主体的な意味の問題、つまり教団が自己自身の行動をどう意味づけるかであり、更に日本人が無意識に抱いていた宗教意識を社会的場で問い直すということです。自らのアイデンティティを認める——教団としては特に自分たちの教えの意味を問うことになるのですが——ことが、教団の存立あるいは教団の社会的存在理由の根本命題となるわけです。

日本の知的環境が、今まで以上に人間の精神的側面への関心を深くしつつあります。二十一世紀に向けて日本社会全体が大きな変化の予兆を感じさせていますが、「宗教とは何か」の問いは最近の一連の事件もあって、日本人全体の問いになろうとしています。それぞれの教団がこれに答えなければならぬし、その答えが教団を支える支柱となっていくでしょう。

日本の宗教は一般的には習俗的儀礼的要素の濃い形で宗教史を作ってきました。このことは一面、宗教が教団的・イデオロギー的規範拘束を個々人にあまり与えなかったという点では、特に日本社会の近代化に役立ったと言えます。しかし、他方、習俗的宗教体系は、その内部

とは一線を画することが可能なオカルト風の色合いを混えたカルト・タイプの傾向をもっています。エルンスト・トレルチの説では、カルト型教団（トレルチはミステイリズム・タイプと言っていますが）は二層分解の傾向をもち、一方では知識階級に似合う個人化の性格が強く、情報を通じての間接的なゆるい連合体の組織を形成し、他方では大衆的で狂信的な自己中心的運動型の小組織にまとり社会からの脱落傾向を生みやすいと言っています。日本の新新宗教教団については、多角的な研究が行われていますし今後も議論のあるところですが、ここではそれには触れません。ただ、カルト・タイプの教団の簇生がこの第三期の課題を産み出した要因の一つであることは間違いないでしょう。

それが、アイデンティティの機能をめぐる問題です。現在の哲学再考現象などとも連動していると思われますが、教団が自己の身元をもう一度確認する働き、更に根本的には「宗教とは一体何か」という問いに改めて取り組んでいこうとする動きです。最初に宗教の定義という問題にちよっと触れましたが、ここでの「宗教とは何か」

に常に未開性への回帰、呪術性への選択的親和力（相性のよさ）を内包します。経済的にも教育水準の上でも世界一流の文明国になったはずの日本に、しばしば市民倫理とあまりにかけ離れた呪術的事件が起こるのは、日本人の宗教意識の問題に深く広い根があることを考えさせずにはおきません。「宗教を問う」などという社会的雰囲気はこれまでの日本の宗教史上に経験のなかったことではないでしょうか。その意味で、まさにこれからの日本社会は「宗教の時代」と言えるかもしれません。

戦後五十年、宗教の役割の歴史は補償から統合へ、そして、自己認知の時代へと展開しました。いずれの機能においても先導の役割をつとめ、またつとめるであろう新宗教教団の新しい世紀への船出を期待するもの大なるものがあります。常套的表現ではありませんが、生きることの喜びと幸せとを認知させる宗教が、結局はその存在理由を全うできるのではないかと結びたいと存じます。

（あかいけのりあき・愛知学院大学教授）

（本稿は一九九五年十月三十一日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです）